

『サピエンス全史 上下合本版 文明の構造と人類の幸福』

Sapiens: A Brief History of Humankind

橋本 大也 Daiya Hashimoto

デジタルハリウッド大学 教授
メディアライブラリー 館長

人類の進歩史観を客観的かつ科学的に「ちゃぶ台返し」する、ユダヤ人歴史学者が書いた革新的な歴史書。人類の「進歩」や「発展」の意味を根底から疑う。著者は人類の歴史に大きな影響を与えた3つの革命を定義している。認知革命(7万年前)、農業革命(1万2千年前)、科学革命(500年前)、これらがどれも人類史に大きな変化をもたらしたということに異論のある人は少ないだろう。

しかし、農業革命は人類にとって跳躍ではなく「罨」だったと指摘する。人類は狩猟採集をやめて農業を始めた結果、数の上では劇的に増えたが、個人の生活は決して改善されず、むしろ栄養が偏り、労働時間は長くなり、状況は悪くなったのだ。人類が進歩と考えてきた事柄は、種の繁栄であって、必ずしも個人の幸せにつながるわけではなかったというのが著者の意見だ。そして種の繁栄という意味では、今の地球上には人類よりも家畜の数のほうが数が多い。実は人類は家畜動物を増やす脇役的存在に過ぎないなどと論を展開していく。

本書は1998年にピューリッツァー賞を受賞したジャレド・ダイアモンドの『銃・病原菌・鉄 1万3000年にわたる人類史の謎』に啓発されて書かれたそうだが、ジャレドが銃をはじめ3つのモノに着目したのに対して、ユヴァル・ノア・ハラリが重きを置いたのはコトの軸である。

彼は、歴史の駆動要因として、特定の発明や事件ではなくて「想像上の秩序 (the imagined order)」を挙げた。法律、お金、神、国家などが信じている秩序だ。現代の世界では、神が人を創った、人間は平等だ、自由市場は最高の経済システムだと多くの人が信じている。しかし法律、お金、神、国家、キリスト教や民主主義や資本主義といったものはすべて実体も根拠も持たない相互主観の産物である。これらは物質世界に融合し、人の欲望を作り出す。想像上のものに過ぎないが、その人に及ぼす力はあまりにも強力で、人間は想像上の秩序という刑務所の壁から外へ出ることはできないと著者はいう。

著者は、説得力のある語りを通して、何かを絶対化するのではなく、すべてを相対化していく。すべては想像である、フィクションなんだよと教えてくれる。私たちの常識だと思っていたものが、実はこんなにも色メガネをかけてみていたのかと気がつかされる。歴史書の真骨頂といえる。

この本が世界的ベストセラーになった理由のひとつは、Facebookの若きCEOマーク・ザッカーバーグが自身の主宰するブッククラブで激賞したことだった。Facebookは世界で20億人が利用する人類史上空前にして最大の「想像上の構築物」といえるだろう。ユヴァル・ノア・ハラリもまたそのFacebookで積極的に情報を発信している。

説得力のある歴史学を読んだ後は、続編の『Homo Deus: A Brief History of Tomorrow』もおすすめである。この新作では人類のこれからが語られており、「で、これからどうなるの?」という展望を聞いてみたい人は続けて読むのがおすすめ。



『サピエンス全史 上下合本版 文明の構造と人類の幸福』
ユヴァル・ノア・ハラリ 著 柴田 裕之 訳
発行：河出書房新社